漢詩神奈川

第　13　号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市栄区笠間
5-3-2-103

TEL−FAX
045-895-2662

発行人　岡崎 満義
編集人　桜庭 慎吾

―新しい流れが見えてきた―
神漢連の平成二十四年の活動をふりかえって

会長　岡崎 満義

平成二十四年、神漢連の活動の中で、うれしいことがいくつもありました。それはうれしいだけでなく、将来の神漢連の活動の方向性への大きなヒントになりそうな出来事でした。

1. 春の研修会で大谷明史さんの詩が第一位の票を集めたこと。「夢裏奉送葦舟中山清先生」と題する詩です。

（岡崎会長）

寂寂江邊午夢中　寂々たる江辺　午夢の中
孤山吹下落花風　弧山　吹き下す　落花の風
葦汀遙望水天際　葦汀　遥かに望む水天の際
一點行舟向碧穹　一点の行舟　碧穹に向う

ご承知の通り、葦舟　中山清・前会長は神漢連発足の時から、「初心者入門講座」を積極的に推進されました。五年間、中山さんは毎回、六回の講座の冒頭に講義され、そのあとの“寺子屋方式”という少人数の指導法を推し進めてこられました。亡くなられたあとも、このやり方を踏襲して現在に至っております。大谷さんはこの第二期生です。中山さんの薫陶を受けた大谷さんが、中山さんを悼む立派な詩を作ってくれたのは、とても嬉しいことでした。私は早速夫人の中山八重子さんにこの詩を送り、大層喜んでいただきました。

もう一つ、秋の研修会で城田六郎さんが、「大本詞兄見贈蔵書」という詩を発表され三位の票を集めたことです。

騒客垂涎希覯書　騒客　垂涎　希覯の書
五車賣盡已無餘　五車売り尽くし已に余り無し
閑親尚友應多味　閑に尚友に親しみ応に多味なるべし
金港翰林非蠹魚　金港の翰林　蠹魚にあらず

この詩には本当に感激しました。大本久先輩から、愛蔵された漢詩関係の蔵書を、漢詩を志す次世代の人たちに譲りたい、との申し出があり、昨年の神漢連総会の前に即売会を開き、たちまち完売しました。その収入は全額神漢連へ寄せられました。素敵な漢詩のバトンタッチのスタイルだと思い、ありがたく大本さんの気持ちをいただきました。そしてそのことを城田さんが見事に詩のかたちで表現していただいたことが、喜びをさらに倍増してくれました。これこそが、少子高齢化といわれる今の時代の、素晴らしい生き方の一典型だと思いました。漢詩という枠を超えた、新しいライフスタイルを見る思いでした。高齢になお可能性ありです。

2. 岳精流日本吟院の本部へ漢詩入門講座の“出前”をしたことは貴重な経験になりました。毎回、櫻庭、城田、水城、田原、中島、三村、岡崎がうちそろって出向きました。宗家の横山精真さんの積極的なサポートがあり、実務面をみごとに取り仕切ってくれた久川憲四郎さん（好文会所属）、土屋昇三さん（五友会所属）の力で、一年間にわたる初心者入門講座は無事終了しました。その結果、十八名の方々が神漢

連に入会、今後もサークルを作って研修を続けることになり、城田、三村両氏がアドバイザーとして参加することになりました。

漢詩実作を柱とする神漢連ですが、その周辺にある詩吟のグループとは、やり方次第で、提携関係ができるようです。湘清吟詠会に私が二回、漢詩鑑賞の講座に出向いたことも新しい出来事でした。「酒とユーモア」「“漢詩にみる女”考―佐藤春夫『車塵集』を中心に」という演題で、それでも六〇名余の方々が参加してくれました。詩吟の会のほかに、書道のグループとの交流も可能ではないかと希望を持ちました。

3．理事の古田光子さんが、朝日カルチャーセンター湘南で、漢詩入門講座を四月から開講、月一回の講義に十三名の受講者があって、今後も継続していくように思われます。これは神漢連にとって、まことに意義のあることです。故中山清さんが二年続けた講座が、よき後継講師を得て続けられることになったのは、うれしいことでした。

4．神漢連のホームページが四月にスタートしたこと。飯島敏雄さんが専門技術を生かしてホームページを作ってくれました。内容は三上光敏さん、川上修己さんたちが中心となって、月に一度は更新する体制ができています。アクセス数も一三〇〇を越え、これからは、このホームページを通じて初心者入門講座への申込みも出てくるのではないか、と期待しています。中に使われる絵や写真も神漢連のメンバーの手になるもので、まさに手作りの感いっぱいのホームページになっています。私の友人のジャーナリストが「近頃こんなに作る人の情熱を感じたHPはない」と激賞してくれました。ぜひ一度覗いてみてください。

5．酒井謙太郎さんが漢詩集「素庵閒情集」を出版されたこと。酒井さんは朝日カルチャーセンター横浜の窪寺貫道先生の漢詩実作教室で十年余勉強されたその成果が「素庵閒情集」となって結実したわけです。収められた詩の美しさもさることながら、八十歳の年から漢詩に挑戦して、これほどの結果を詩集として、目に見える形で世に問われたことに驚くばかりです。漢詩の勉強は八十歳からでも遅くない―何という大きな励ましでしょうか。この詩集を読むとほんとうに元気が出てきます。

6．窪寺貫道先生を迎えて、五つの漢詩サークル交流会が実施できたこと。初心者入門講座を“卒業”したあと、それぞれサークルを作ってほぼ二ヶ月に一回の勉強会を続けています。金星会、三水会、好文会、詩遊会、五友会と五つの会がせめて一年に一度くらい顔を合わせたい、という声にこたえて、窪寺先生をわずらわせて、サークル交流会が実現しました。（今年から第六期生の以文会が加わります）今年の第二回は、これを更に発展させて、“バトル漢詩甲子園”と銘うって、サークルごとに七言絶句を二首提出し、覇を競ってみようということになりました。窪寺先生には、“審判”として判定・講評をしていただくことになりそうです。神漢連の活性化がさらに進むことになります。

7．神奈川新聞の第五日曜日の文化欄に、岡崎満義「漢詩への誘い」の連載が始まったこと。数年来、ことあるごとに神奈川新聞に何とか漢詩の記事を掲載してほしい、と工作を続けやっと認められたのでした。夏目漱石が大正五年に亡くなりその翌年、朝日新聞の紙面から漢詩欄が消えて以来、全国の新聞から漢詩が姿を消しました。漢詩は日常的に人の目に触れることが無くなりました。学校教育からも漢詩文は次第に遠ざけられてきました。どの新聞にも毎週、俳句、短歌、川柳は載っていますが、漢詩を見かけることはついぞありません。何とか漢詩にも陽の目を見させてもらいたい、と頼み込んでやっと第五日曜日に六百字のスペースで紙面を貰うことができました。四月、七月、九月と三回連載して次は三月。その打ち合わせに神奈川新聞の文化部長さんを訪ねたところ、「あの『漢詩への誘い』は読者の評判が良かったので、来年は毎月第一日曜日掲載としたい」との話。願ってもないことで、二つ返事でオーケー、喜んでいます。月一回となれば、神漢連の活動なども適宜紹介できると思っています。

以上、主な活動を振り返ってみて、平成二十四年は神漢連の将来の可能性の新しい芽生えが見えてきたように思います。今年は全日本漢詩連盟創立十周年の年でもあり、神漢連もさらに飛躍の年にしたいと思っております

平成二十五年の活動に向けて

事務局長　櫻庭 慎吾

① 平成二十五年の県連の活動は二月十五日に開催予定の理事会における事業計画(案)の討議からスタートします。

② 初心者入門講座は第七回目の講座として、例年どおり実施いたします。第一期生より平成二十四年の第六期生まで六つの漢詩サークルが活動しており、県連の組織を支える重要な活動拠点となっております。

第七期生の講座は四月より六月までの三ヶ月、月二回のペースで計六回を予定しております。会員の皆様には、是非とも漢詩に興味を持つ人をご紹介ください。定年後に趣味を始めようという方には好適な講座です。現役の方、女性の方ももちろん大歓迎です。詳細日程は十六頁をご覧下さい。

③ ホームページの充実について

平成二十四年よりスタートした県連のホームページも軌道に乗って参りました。会員に対して一層きめ細やかな情報の提供と、魅力ある内容の編集に注力して参ります。またホームページを利用して新入会員を拡大してゆく方策についても検討してゆきたいと考えています。

④ 昨年は吟詠界へのアプローチとして、岳精流日本吟院の漢詩作法入門講座に県連として講師を派遣し、その卒業生は漢詩サークルを結成し勉強を続けております。これらの経験から私共は、吟詠界の方々が漢詩に対して強い関心を持っていることを知るとともに、聊かなりとも貢献することが出来たのではと考えております。

そして次の目標として、書道界に対して私共として何が貢献できるかという切り口で考えてゆきたい、即ち漢詩を“なかだち”として界面を出来るだけ拡げ、両者の交流が促進されるような具体的プランを打ち出して参りたいと考えております。

⑤ その他の活動としては、春と秋の研修会の実施、また秋期には恒例となっている吟行会も実施の予定です。春の研修会の日程は本紙十六頁のスケジュール欄をご覧下さい。

⑥ 県連の組織運営については、理事及び運営委員の尽力に大きく支えられております。

本年は各プロジェクトが着実に成果を得るように、責任と権限を明確にすることにより、その活動が一層活発化するよう努めて参ります。

九月二十五日 横須賀吟行会中止される

京浜急行線の土砂くずれにより

吟行当日の九月二十五日早暁、京浜急行の線路上への土砂崩れにより不通となったため急遽中止の措置をとりました。

年一回の恒例行事として、会員の皆様には楽しみにされていたと思いますが止むを得ぬことでありました。

吟行会については本年二十四年度内の実施は見送ることに致します。事前の下見、漢詩資料の用意など準備に尽力されたプロジェクトチームの労を多といたします。

（事務局）

岡田理事の教室が地元紙に紹介される

岡田理事の教室は毎週一回、漢詩の解説・鑑賞を基軸に、詩吟と作詩の両方を学習していますが、このたび地元座間市のタウン情報紙に活動の内容が紹介されました。

記者が教室に来訪し、学習を傍聴したあと取材を受けました。

岡田理事の「詩吟は作者の気持になって詠うことが大切です。詠うだけでなく自分で詩を作ることで漢詩に対する理解が深まり、楽しみ方が倍になります」という談話や、会員の「まず詩を分かりやすく丁寧に解説してもらい、味わってから吟じるので、自分のものとして詠うことが出来ます。和気あいあいとした雰囲気で仲間と楽しんでいます」という感想などが掲載されました。

教室としては他に、座間市の文化連盟や詩吟連盟の行事に積極的に参加、文化センターでの自作漢詩の展示公開や、春・秋の市の連盟の吟道大会への出場などの活動を行っています。

（吉岡記）

第六期生『以文会』を立上げ

世話人　齋藤　護

平成二十四年度の神奈川県漢詩連盟主催の第六回初心者入門講座修了生約四十名の中、二十名の有志で漢詩吟社を立上げました。

一、会の名称は『以文会』となりました。以文会の出典は論語　顔淵廿四から「曾子曰、君子以文会友、以友輔仁」(曾子の曰く、君子は文を以て友と会し、友を以て仁を輔(たす)く)で意味は「君子は文事(詩書礼楽)によって友だちを集め、友だちによって仁の徳(の成長)を助ける」であります。名称に負けないように、文を以って事に当たりたいと思います。

二、会の運営は奇数月の第三木曜日、午後一時から四時までとし、場所は神奈川近代文学館2階とします。講師には桜庭慎吾、中島龍一両先生に引き受けて戴きました。会員は女性六人、男性十四人の構成で、世話人四名(柴田、大森、香取、齋藤)を指名、会の代表は柴田洋さんです。

三、去る十一月十五日に、第一回を開催致しました。これまでの諸先輩の貴重な経験とノウハウをいただいたお蔭で、意外とスムーズに第一回を無事終了することが出来ました。

四、漢詩を始めた動機は人それぞれでありましょうが、殆んどの会員は還暦を過ぎ致仕後の人生、余裕ある時間を人生最後の趣味として、作詩に励もうという次第です。古稀をすぎた身で四壁秋冷の夜、燈火のもと机に向かい辞書を捲る姿を見られて、女房や娘に半ば驚かれ、揶揄嘲弄の中で始めています。そして、蓋棺のとき辞世の一首を大書して残してゆきたいと密かに考えております。

岳精会に漢詩研究会が発足

世話人　家吉　幸二

私達は川崎に総本部を置く岳精流日本吟院の吟詠を親しむ会員です。横山精真宗家が県漢連の会員であることから宗家作の漢詩も札幌から沖縄までの会員は吟じております。

折もおり、昨年宗家が神漢連に漢詩作りの教育を依頼したところ、快く受けていただき神漢連の岡崎満義会長をはじめ役員の諸先生が十一月から毎月「出前講座」を総本部で開講していただけることになりました。三十数名の生徒が参加して前期・後期各五回の漢詩初心者講習会がスタートしました。

毎回岡崎会長以下五～六名の先生が、全体講義と生徒五名ほどの「寺子屋方式」を組み合わせて、それはそれは熱心に情熱を注がれ、「詩とは何か」「詩は志なり」「漢詩づくりは根気と情熱」等々基礎的なことから作詩・合評などへと核心へ進んで行きました。漢詩のルールである平仄・韻・起承転結から孤平・和語など「寺子屋方式」での質疑応答は何度も繰り返され、これが効果的でした。横山精真宗家が「最後まで諦めない、まず一詩作ってみる」などと気合を入れることもあって、喰らいついて学んでいるうちに興味が湧いてきました。

そして十月二十七日に十回の講習会が終了、新たに「岳精会漢詩研究会」が即日発足の運びとなりました。県漢連の城田六郎・三村公二両先生のご指導を願うことになりました。登録者は十八名です。

日本の漢詩の歴史は万葉集よりも古いにも拘らず、戦後は漢文・漢詩がすたれ教科書からも消えましたが、今また漢詩講座などで静かなブームになりつつある気がします。漢詩を鑑賞して作って楽しむという趣味が吟詠と共に両立できれば、この上ない喜びでしょう。

会計担当からのお願い

神漢連は、皆様からの会費のみによって運営されております。

会報発行・送付、総会案内等の諸費用は、全て皆様からの会費のみによって充当されますが、残念ながら約二割の方々が会費未納となっております。お気づきの方は、是非納入頂きたくお願い致します。納入方法は、郵貯銀行の神漢連口座へ振込でお願いします。口座番号は次の通りです。

〇〇二三〇―三―三八八六八

会員詩壇
―詩と作者の思い―

秋の研修会

城田　六郎

秋の研修会は、十月九日(Aグループ)と二十四日(Bグループ)に分かれて五十三名の参加を得て実施した。特に今回は新人である六期生十名の参加を得たことは特筆すべきことである。研修会も回を重ねるごとに、平仄の誤り等のミスは確実に減少しており、今後は内容の向上を期待したい。

今回も前回に引き続いて上位入賞者には岡崎会長より奨励のための賞品が贈呈された。その中には六期生の秋吉さん、香取さんが含まれていることは大変心強いことです。

◇　◇　◇

各グループの一位および受賞者の作品と感想は次の通りである。

Aグループ

寄擧重三宅宏美選手　　岡崎満義

静閑調息鐵輪前　　静閑　息を調う　鉄輪の前
脚震頬膨高擧全　　脚震え頬膨らみ高く挙げて全し
恰見千斤抜山力　　恰も見る　千斤　山を抜く力
破顔少女聳雙肩　　破顔の少女　双肩を聳やかす

秋夜

西風颯颯早涼生
爽氣侵肌入夜清
堂下啾啾寒蟋蟀
檐鈴微動送秋聲

池上一利

西風　颯颯として早涼生じ
爽気　肌を侵して夜に入って清し
堂下には啾啾たる　寒蟋蟀
檐鈴　微かに動きて秋声を送る

想鐵舟

參禪學劍幾辛酸
豪果至誠心自安
深語南洲千歳意
死生不二共艱難

香取和之

禅に参じ剣を学び　幾辛酸
豪果　至誠　心自ずから安し
南洲と深語す　千歳の意
死生　不二にして艱難を共にす

加賀那谷寺即事

蘇徑縈回大樹間
觀音靈刹自生山
蕉翁一首添風趣
聳立奇岩物外閑

萬谷美次

蘇径　縈回す　大樹の間
観音　霊刹　自生山
蕉翁の一首　風趣を添え
聳立す奇岩　物外に閑なり

Bグループ

待暘

四更病室白燈寒
術後良人顔色乾
點滴遲遲刻停處
相偎相倚待暘看

大原真理子

四更　病室　白灯寒く
術後の良人　顔色乾く
点滴遲々として　刻停まる処
相偎り相倚り　暘を待ちて看る

荒疇花

海嘯殘痕曠漠鄉
一叢楚楚野花光
誰能灌沃生生色
弔慰遊魂凝靚妝

飯沼一之

海嘯の殘痕　曠漠の鄉
一叢楚楚として野花光(かがや)く
誰か能く灌沃せしや生々たる色
遊魂を弔慰せんと靚妝を凝らす

牽牛花

雨霽早晨秋氣加
階前夏草絶殘葩
豈期庭際露深處
籬落兩三紅紫花

吉岡昭夫

雨霽るる早晨　秋気加わり
階前の夏草　残葩絶ゆ
豈期せんや　庭際　露深き処
籬落に両三　紅紫の花

回鄉

同袍一夜會家鄉
竹馬親朋何得忘
讌語纏綿蘇往事
白頭交寄幾杯觴

秋吉邦雄

同　袍一夜　家郷に会す
竹馬の親朋　何ぞ忘るるを得んや
讌語纏綿　往事蘇り
白頭　交り寄す　幾杯の觴

受賞者の感想など

池上一利

作品は九月に岳父の法要で箕面の寺へ行った時のものである。残暑もやや緩み、夜ともなると涼しい風が吹き始め、庭内(堂下)の虫の声、軒端の鈴の音と詩語がそのまま絵になったようなシチュエーションであった。

そのお蔭でフイクションをほとんど交えずに、またいつもは苦労する結句も比較的容易に出来上がったように思う。

畳語の使用方法で貴重なご意見を二三頂いたので、推敲を重ね完成を目指したい。

日頃は辞典や詩語表をひねっている姿を冷ややかに見ていた荊妻も賞品のワインを飲んでからは目つきが穏やかになったような気がする。先ずは葡萄の美酒に多謝。

香取和之

初心者入門講座の六期生です。私は、昔から漢詩には関心があり、李白や王陽明の詩、また述懐(魏徴)は特に好きです。しかし、漢詩を自ら作るという事は考えも致しませんでした。偶々、礒野衞孝先生が月二回主催している「鎌倉漢詩の会」の存在を知り、退職後の楽しみの一つになればと思い、軽い気持ちで昨年十月に入会致しました。今春、神漢連の入門講座が開催されるとの事で参加を勧められた次第です。

山岡鉄舟については、当時静岡迄進軍していた西郷隆盛のもとに単身で乗り込み、後の西郷―勝会談のお膳立てを行い、さらに西郷を説得して主君慶喜の備前藩お預けを撤回させる等、その生き様には感激することが多い文武両道の人です。「想鉄舟」では、このような鉄舟の生き様と、西郷南洲遺訓の「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業はなし得られぬなり」を踏まえて作詩しました。

研修会では、「豪果」は漢和辞典になく「豪毅」に、また「南洲と語る」は「語与南洲」とすべきとのご指摘をいただきました。

萬谷美次

この詩は、かつて松尾芭蕉が奥の細道の旅で加賀那谷寺に立ち寄って、「石山の石より白し秋の風」と詠んだ句碑のある寺です。今年初夏に参詣し、感じたことを作詩したものです。

承句の「自生山」は山号で固有名詞なので詩題を「自生山那谷寺」とすべきであったかと反省しております。

研修会は一首ずつ先生方が丁寧に推敲のお手本を示して下さり眼からうろこが落ちる思いを何度も味わいました。先生方の作品では擬人法を取り入れた詩や回文詩という、末尾から逆に読んでも韻・平仄が整い立派な内容の詩、また詩語が及びもつかない深い意味のあるものがふんだんに取り入れられた詩などで、素晴らしい勉強ができました。

大原真理子

病室で朝を待つ思いを綴った自身の作品が、思いもかけぬ評価をいただきました。

三十年余の結婚生活での初体験、夫の入院と手術。ありふれた手術と判ってはいても、直前に次々求められるリスク承諾書面へのサインに心細さがつのり、又、病室の冷ややかさや進まない時間にも気持ちがふらつきました。当たり前の日常を改めて思い一夜を過ごしました。

起句はそっけないほどのTPO。承句は、戻ってきた夫の唇がガサガサでしたので読み込もうかなと思い辞書で「乾」を引いたところ、生気が無いの意があることを知り、このようにいたしました。

起句の「寒」、承句の「乾」が定まった時、作品に血が通ってきたように思います。

私は一昨年の初心者講座受講生で、四期生の詩遊会で丸二年に満たぬ新参者です。会に参加して未知の世界が次々と広がってくる快感と交友の楽しさ、尽きぬ漢字の魅力には抗しがたく学習を継続しています。

尚、詩題は日へんの漢字をあれこれ眺め、ぬくもりのありそうな字を選びました。

（研修会の一コマ）

飯沼一之

昨年の東日本大震災の復興を支援しようとNHKが製作した「花は咲く」(岩井俊二詞・菅野よう子曲)をテーマとした番組が九月五日に放送されました。

西田敏行・荒川静香・千昌夫・中村雅俊など、被災県出身の多くの人たちが出演しました。被災地の復興が遅々として進まない中で明日への希望を失わず、日々仕事に励む人たちの姿が紹介されました。ピアニストの辻井伸行は、福島の安積中学校を訪ねて、合唱部の生徒たちが歌う「花は咲く」の伴奏を買って出ました。このコーラスはスタジオにも来て、辻井さんのピアノも加わって、全員が合唱して番組は終わりました。私も思わず拍手をしてしまいました。

その番組の中での一シーン。広漠とした海辺で、数人が集まって一叢の花に水を注いでいる場面が映し出されました。ただそれだけの数カットでしたが、見終わって様々な思いが胸をよぎりました。鎮魂と希望への祈りが言葉を紡いでこの詩になりました。

吉岡昭夫

いつまでも初心者といえない段階に入ってしまいましたが、不勉強を反省しております。七絶については韻や平仄は頭に入ったものの、起承転結の組み立てがまだまだ未熟で、字句も同意語や類似語を多用してしまう等、語彙が貧弱です。手入れを怠った朝顔が夏も終わり近くに咲いた健気さに感じ入って作ったものですが、選んで下さった方々にはこの詩情にご同感頂いたものと思っております。

秋吉邦雄

思いがけない得票で、初学の身としては面映い限りです。承句と転句は当初「少小交情何得忘　讌語纏綿蘇竹馬」でしたが、講師の諸先生より「少小」と「竹馬」は重複のきらいがあり、また「竹馬」だけでは舌足らずの感もあるとのご指摘を頂いて、前掲のように改めてみました。なお結句の「交寄」は当初「相奇」としましたが、「相」が冒韻なのでこれを嫌って「交」に改めました。

小生これまで漢詩を学ぶ機会を得ぬままに過ごしてきましたが、今年四月より玉井幸久先生の漢詩教室で六十ならぬ八十の手習いを始め、併せて神漢連の初心者入門講座の六期生としてこれを受講し、引き続き漢詩づくりのご教示を戴いているところです。

今後とも、漢詩の持つ大きな魅力に惹かれながら、少しでも高みに登れるよう精進してまいる所存です。

新潟の諸橋徹次博士記念大会「奥風詩筒」受賞作

奨励賞・朝日新聞新潟総局賞　大原真理子

紅山櫻遇雪　　紅山桜遇雪

道東中呂氣颼颼　　道東の中呂　気　颼々
荒徑寒村促旅愁　　荒径　寒村　旅愁を促す
夜半窓前清朗月　　夜半　窓前　清朗の月
紅花紫葉雪幽幽　　紅花　紫葉　雪幽々

紅山桜はエゾヤマザクラのこと。赤茶色を帯びた若葉と同時に花開く葉桜である。牡丹色でほっくりとした風情。春の息吹を大らかに伝えてくれる。

五月連休後でも時に暖房を必要とする北海道では、この桜は雪と遭遇する。そこに、月も加わる。この優艶な趣にひかれた。

幕末の探検家松浦武四郎の日記(安政五年四月十三日)にも「さえわたる月に起出でてながむれば花咲きまぜて淡雪ぞふる」との歌があり、このイメージもだぶらせながら、自然の神々しさ、時を越える共感の念などを片鱗でも示せたら・・・・と願った。

とはいえ、創作一年足らず。詩題は当初は紅山桜雪月花で、内容ももたついた表現の羅列。詩游会の櫻庭・住田両先生に丁寧なご指導を戴いた。

又、二十三年秋の研修会でも城田先生はじ

め皆様からご助言をいただいた。「神奈川方式」あってこその受賞と感謝している。

秀作賞

三村公二

廢屋薔薇

日夕餘光照一園
嬌花半落傍頽垣
捜紅粉蝶來還去
無主三年草守門

廢屋薔薇

日夕の余光　一園を照らし
嬌花半ば落ち　頽垣に傍う
紅を捜る粉蝶　来りて還た去る
無主三年　草　門を守る

今回、受賞はないと諦めていたので、秀作の連絡を頂いた時には正直驚いた。と云うのは、応募した詩には重大な欠陥(失敗)があると思っていた(今も思っている)からである。

それは結句の末尾「草守門」である。ここは詩稿提出直前までは「獨守門」(又は「荊守門」)とし、詩題の薔薇が廃屋(＝門)を守っているという事にしていた。

しかし、「倚門」の子供の帰りを待つ母親と間違われても困るし、又、薔薇は頽垣に傍っているから門を守るのは物理的に無理だと、元技術屋特有の変な屁理屈が出て咄嗟に廃屋だから「草」と直してしまったのである。投函してから期限まで一週間あったから差し替えを送ろうかとも思ったが、主題は分散するが「草」でもいいかとそのままにしておいた。

「獨守門」としたらどういう評価を受けたのか、詩の問題点は他にあり、単に重箱の隅をつついているにすぎないのか、諸先輩方のご意見を聞いてみたい所である。

秀作賞

礒野衛孝

土用有感(寄學友會)

恒例食鰻炎暑前
衰郎鼓舌又垂涎
曾聴焦土肝蟲唸
生得八旬相與憐

土用有感(学友会に寄せる)

恒例　鰻を食らう炎暑の前
衰郎　鼓舌　又　垂涎
曾て聴く焦土　肝虫の唸るを
生き得たり八旬　相与に憐れまん

図らずも秀作賞を戴く光栄に浴しました。私は所謂「戦中派」に属する人間で、中学二年の夏に終戦を迎えました。而して八十を越す年齢にまで生き延びた今日、少年時代に経験した戦時下の体験を漢詩として残しておきたいという心境になりました。

空襲による焼夷弾で完璧に焼け野が原になった東京で、十四歳の食べ盛りの少年が、饑じい思いをした経験は現代の方々には口で説明しても中々判っては頂けません。漢詩ならばその感情が表現出来るかと思って作った詩です。

私は横浜朝日カルチャーで窪寺先生の訓導を受けさせて頂いており、よき先輩もおられて、この詩の「垂涎」はそちらから拝借したものです。「鼓舌」は漢語ではしゃべりまくることと知りました。この詩の問題点は「肝蟲唸」にあります。漢語には有りませんが、当時に実感としてこれ以上の表現方法が見つからず使わせていただきました。当初は「腹蟲」でしたが腹を肝に替えて応募しました。この点は窪寺先生の添削はお受けしておりませんので申し添えておきます。

学友との交流の機会には、その都度、漢詩を作るので些か皆に飽きられているようですが、昔どこかで聞いた「一粒で二度おいしい」の伝で、一つの行事を漢詩でもと二度楽しんでおります。時々は判ったと言ってくれるのが楽しみです。結句だけ出来ましたので、

「餘命裁詩獨自娯」。

入会案内

神奈川県漢詩連盟は本紙に掲載したような諸活動を行っている、漢詩を楽しむための会です。友人・知人にも是非入会をお勧め下さい。

●会費
一般会員　年二千円
賛助会員　一口年一万円

●初心者講座
毎年四月～六月に開催しており(月二回、計六回)受講料は二千円ですが、そのまま入会すれば受講料＝初年度の年会費となる特典があります。

●問合せ・申込先
＊電話・ファックス
045-895-2662(事務局長桜庭宛)
＊ホームページ(→Eメール)
http//www.shinkanren.sakura.ne.jp
(→shinkanren@email.plala.or.jp)
入会申込書がついています。

会員便り

五輪柔道応援記

監事　住田　笛雄

小生目下、公益財団法人全日本柔道連盟の監事を務めている関係で、先般のロンドンオリンピックの柔道の応援に行ってきた。結果は余り芳しくない、との印象を皆さんがお持ちのようであるが、メダルの数は北京と同じ七つで、身内からみると、そこそこ良く頑張ったのかな、と思う。

先ず驚いたことは、その全世界に亘る普及である。アルファベット三文字の略号ではどこの国だか判断のつきかねる所が沢山あった。柔道は最早日本の柔道ではなくなっている。嘉納治五郎師範の先見の明に感服した。

しかし、それに伴って、各国の取り組み姿勢も異っている。例えば、中国や韓国では、金メダルを取ることが国威発揚の「国家的政策」で、選手育成に膨大な予算をつぎ込み、金メダルを取ればその選手は一生生活が出来るほどの成功報酬が与えられるようである。しかし、日本は、日本の柔道なのだから、勝って当たり前、として、選手強化費も何十万円台で、めでたく金メダルを取ってもほとんど褒賞は無い。

世界の柔道になって、昔の日本の柔道とは異質になっている。試合を見る限り、寧ろ昔の柔術になっているのではないか、とすら思える。どのようにして「勝つ」のか、勝つためのガッツを欠いては絶対に勝てない。正しい日本柔道で試合に臨む日本選手には、この点で他国選手に一歩遅れがあったように見受けられた。

その点で、唯一の金メダルに輝いた松本薫選手は見事であった。試合に臨んだ時の彼女の表情は、ガッツに溢れていた。また、帰国後、震災慰問で仙台を訪れ、ステージの上から参会者に問いかけた笑顔は、誠に爽やかであった。将に芳紀二十四歳の彼女を讃える一首を左に記して筆を置く。

烱烱眼光臨戦場　烱烱たる眼光もて　戦場に臨む
鬪魂横溢獲金章　斗魂横溢　金章を獲ちえたり
歸來笑問我如獣　帰り来たって　笑って問う　我は獣の如きかと
却識妙齢紅頬嬢　却って識る妙令の紅頬の嬢なるを

漢詩鑑賞の集い―『漢詩の中の女』考 佐藤春夫『車塵集』を中心に

三上　光敏

平成24年10月21日(日)、三浦市南下浦市民センター講義室にて第2回漢詩鑑賞の集いが開催された。講師は神奈川県漢詩連盟会長岡崎満義先生。参加は当会会員と近隣の横須賀吟詠会会員の約七十名。先ずは講師の漢詩に興味を抱いた動機、恩師の吉川幸次郎著「新唐詩選」がきっかけで、佐藤春夫著「車塵集」の自分流に訳したものや井伏鱒二の「厄除け詩集」での訳に惹かれたことから始められたという。配布されたテキストには、佐藤春夫「車塵集」四八首のうちから十六首と佐藤春夫の評価が定まったと言われる「秋刀魚の歌」、杜牧の「遣懐」、「題禪院」および「泊秦淮」など九首そして講師自作詩の「寄挙重三宅宏美選手」、「贈撫子日本女子足球隊」など三首が対象。日本と中国との詩の内容の違い―日本の詩は恋愛ものが多いのに中国は友情のものが多いとか、日本人の訓読法発明の素晴らしさや、漢詩作りに必須の平仄の話、そして漢文の“書き下し文”は意味はとっているが元の音は捨て去ったことなど、興味深い。テキストに沿った講義は勿論、行間の活字にない話は更に面白い。極めつけは佐藤春夫と谷崎潤一郎・三千代の関係など、この辺りにいたると何故か女性陣の耳の角度が変わる。そして文壇裏話、登場人物数は二十名くらい。講師の幅広い人脈は「すごーい」の一言に尽きる。後半は杜牧の七言絶句九首、馴染みの「江南春」や「山行」が入っていて一遍に漢詩が身近になった気にさせられる。最後は講師の近作の七言絶句三首。中でも「贈撫子日本女子足珠隊」はわれわれにあの時の興奮を思い出させた。アッと言う間の百分でした。

八年目のひとりごと

瀧川　智志

漢詩の作り方を教わり始めてから八年目になる初心者のひとりごとですが、初心者には難しくて、不可解なことが沢山あります。

「詩韻精英」を入手すると、その中に「絶句圖表」が一枚添付されています。その図表の七言絶句の平仄規則は作詩入門書に比べ一段と規則が厳しくなっています。普通、1，3，5文字目は孤平・下三連が生じなければ平仄問わずと教わりますが、この図表では、1，3，5文字目の平仄がそれぞれ逆になるように規定されています。

この図表が存在するということは、この規則に則って作詩した先人もいたのでしょう。

日頃、規則に四苦八苦して、ついついよりゆるい規則を喜んだりするのは、本来逆の見方なのかもしれません。対句、蝉連体、回文などいろいろな規制を自らに課して作詩を楽しむ場合もあることを考えれば、より厳しい規則をむしろ喜びと考えるべきなのでしょう。

冒韻

当初、冒韻は4句いずれにおいても禁止と教わりました。その後、転句は韻を踏まないので冒韻に当たらないと知りました。さらにその後、4句いずれにおいても冒韻は問わずとなって今に至っています。わずか八年の間にも規則が変わることに戸惑いを覚えます。規則は流動的で確定版がないことは最初に教わりましたが、何を頼りにすればよいのでしょう。

冒韻に限らず作詩の世界は、初心者にとっての自由裁量の範囲は限りなく0に近づくのかと思ったりします。漢詩とはそういうもので、それが作詩の面白さであるのかとも思います。

旧字

漢詩は旧字で書くことになっていますが、旧字の定義は当用漢字以前に使われていた字ということのようですが、それが何を指すのか未だによくわかりません。漢和辞典によっても字体の違いがあるようで、手書きするときに悩みます。

最近、近所の老人仲間で「有」の字の「月」の第一画は「はらい」か「とめ」かが話題になりました。漢和辞典を見ると辞典によって違いがあるようです。旧字としてはどちらも可で、書き下し文は「とめ」で書くのがベターかと自分なりに結論としましたが果たしてこれで良いのでしょうか。旧字も細部を気にすれば、不可解なことが次々に出てきます。

和臭

漢詩に国字、和語は使用禁止であり、日本的事象を言うときは用語の吟味が必要であると繰り返し教わります。漢語で作詩せよと指導されます。また、現代の事柄について述べる場合も細心の配慮が必要です。

初心者は、時間・空間的に唐人の理解困難であろう事についての作詩は避けたほうが無難であるというよりは、避けるべきだとの説もあります。

しかし、唐代に精通し、唐人の美意識の完全な理解なしには和臭を避けることはできないのではないでしょうか。

自分の思いを、和習なしに漢詩に自由に表現できる日がいつになったら来るのだろうかと嘆息しています。

剽窃

漢字は先人の賜物であり、詩語もまた先人の賜物です。一句も一詩も先人の遺産です。これらを学び、習って作詩を楽しんでいるのですが先人の見事な句や詩を真似てみたくなります。先人の詩の中にも、そのまた先人の詩の一部を取り入れて名詩となっているものが多数あることを知って、ついその気になり、度を越して、絶句の4句にそれぞれ別の先人の句を借りてみたりします。

そして、これは、いわゆる、剽窃ではなかろうか、などとつぶやきどこまでの真似が許されるのだろうと迷います。

大漢和辞典の「換骨奪胎」の項に、山谷曰「不易其意而造語謂之換骨法、規範其意形容之謂之脱胎法」とあります。若干訳が違うようですが作詩の入門書「詩学還丹」には「古人ノ句勢ヲ其儘ニトリ句意ヲ造理スル」を換骨と言い、「句意ヲ規模已レカ興趣ヲ言ヒノベ、古人ノ句法ヲフマエテ、オノレカ句ヲ成ス」を奪胎と言うとあります。「古人ノ詩意詩句共ニ取リ用テ工ニスル」点化の法といった作詩法では、先人の詩の一部を偸(ぬす)み、一部を変えて新しい詩とするようです。ただし、語を偸む、意を偸む、勢

を偸む、の3偸の中で語を偸むことを、「鈍賊ノコト」「古人ハ決シテセザリシ」こととして、厳しく戒めています。

無意識のうちに「語を偸む鈍賊」となっていることもあるのではなかろうかと恐れますが、こちらの方は、もし、それ程の名句が出来るならば、逆に、喜ぶべきことだろうとも思うこの頃です。永遠のつぶやきは――――「詩とは何か？」でしょうか。

視覚に四角（老生徒妄言）

大谷　明史

「詩」とは太古より声を以て表現されて来た聴覚的技能であったにせよ、書物の出版が普及した近世以来では、通常、人が他者の詩に接するのは、先ず視覚を通してと言うことになろう。現今我が国に於いて、漢詩は一句毎に改行して記載されることが多いので、絶句であれば四行詩として全体が四角形に表示される。この視覚的効果の整然たることに於いて、漢詩は世界に冠たるものであろう。

一方聴覚的効果に就いて見ると、漢字一字の音節を一定と見れば、四言にせよ五言、七言にせよリズム正しきは明瞭である。漢字はその故国に於いて一音節の文字であったと言われる（注一）。従って五言詩は各句五音節で読まれていたことになる。勿論詩の聴覚的効果に関しては音節数やリズムのみに止まらず、音の強弱高低、頭韻、脚韻など多面的な要素を同時総合的に考える必要があるが、此処では憐れむべきモノリンガルたる我が身の立場から日本語で読む漢詩の音節構成に就いて些か考えて見たい。

（注一）例えば石川忠久先生著『漢詩を作る』（一九九八年、大修館書店刊）二八頁

漢詩の形式美を聴覚的にも享受する方法として、日本語に於ける漢字の「音（おん）」で棒読みすることは以前から説かれている処である。この方法に依れば、中国語を解しない我が身にも、たとい原語の響きとは異なろうとも、その形式美を基に文字に密着した音響的効果を味わう事が可能になる。唯、その場合、聴覚的効果をより高める為に、単純に白文を音読みするだけではなく、些か独断的ながら以下のような補強工作を施す案も考えられよう。

日本語で漢字を音読みすれば、一音節の文字と二音節の文字とがあるが、先ず漢字一字の音節を凡て二音節に統一する。即ち、一音節の文字は語尾を長母音にして読むことにする（注二）。更に、旧仮名遣いで表した上で仮名文字の通りに発音する。例えば「せう」を「ショウ」とは読まず、「セ」「ウ」と読むのである。斯くて五言詩は各句十音節に、七言詩は十四音節になるが、前者は二字と三字とに、又後者は四字と三字とに分たれるので、それぞれ四六調、八六調のリズムになる訳である。この時、これを発声しても、その音声は日本語として意味をなさないが、音響的な快感を得る事に価値がある。又詩の表現内容は同時に視覚を通じて認識されることになる。

（注二）但し、「離」「耳」などイの段の字に就いては「ルイ」「ズイ」と言う具合に語尾を"ui"とする案もある。上平声四支韻や上声四紙韻、去声四寘韻に属する文字群には、母音が"i"のものと"ui"のもの（例えば「追」「水」など）とが混在しているからである。

今試みに、よく知られた五言絶句に右の読み方を適用して見る。（ゴシックは仄字を表す）

クウザン**フウケン**ジン、**タン**ブンジン**ゴオキャウ**。
ヘンケイジフシンリン、**フクセウ**セイタイ**シャウ**。

勿論何の詩かはお解りのことであろう。御一興迄にこの詩の英訳例も御紹介したいと考えたが、紙数が尽きたので別の機会に譲りたい。余計ながらこの詩「鹿柴」（王維）は次の通り。

空山不見人、但聞人語響。
返景入深林、復照青苔上。

（空山　人を見ず、但だ人語の響きを聞く。
返景　深林に入り、復た照らす　青苔の上。）

此処で一つ付言すると、結句の末字「上」を訓読で「のぼれり」と読む説もある。慥かに承句の末字「響」は上声二十二養韻であるので、「上」も養韻と考えると（辞典に従って）「うえ」（去声・二十三漾韻）ではなく「のぼる」と解することにも道理がある（注三）。

（注三）入谷仙介著『王維研究』（創文社刊）では結句が「復た青苔を照らして上る」とされている。又前野直彬注解『唐詩選』（岩波文庫）では「上声だから『のぼる』意になるとは、必ずしも限定されない。」（即ち上声養韻であっても「うえ」と読んでも良い）とあり、これは辞典

のレベルを超えた専門的次元での見解と考えられる。

斯様な問題に思い至ったのも、数年前の入門講座以来、神漢連で作詩を学ばせて戴いているお蔭である。

絶滅危惧種からの脱却
―インターネットの効果的な利用―

池上　一利

岡崎会長は漢詩愛好者を絶滅危惧種と、憂いておられる。そこで絶滅危惧の程度と対策をネット利用で調べて見た。

数字は十一月中旬でのヤフーデータである。先ず比較の意味で「俳句」「短歌」「漢詩」を単独で検索すると、それぞれ千五百四十万件、千七十万件、三百四十万件ヒットする。

次に、より実践的に「作り方」とのアンド検索をかけると、七十七万件、百五十二万件、十二万件となる。トップテンを見ると随分詳しいサイトもあり、質量ともに漢詩も意外と健闘しているように見受けられる。

更に愛好者の数を調べてみる。いずれも主観的なデータばかりで大雑把な数字である。全国的組織の有無と会員数、結社・同人誌の数、懸賞時の応募数、レジャー白書の余暇活動への参加人口等を根拠にしている。

俳句で数百万人、短歌で数十万人と推定される。高齢者が多いが、女性比率も高い。中でも短歌は顕著で、女性比率が八割をこえる、との報告もある。

一方漢詩を見ると、全漢連会員数の千七百名をベースに、加入されていない方、興味はあるが、創作はしていない方等も勘案してざっと一万人前後だろう。数の多少は必ずしもその隆盛を意味しないが、絶滅回避の最低限の要件とは思われる。又女性比率を神漢連の二年前の名簿で当たると、二割弱で、短歌と比べると大分低い。

ところで生物種の絶滅の主因は環境破壊である。漢詩に当て嵌めると漢字離れ、高校での漢文教育の減少、大学受験時の選択制などが列挙される。即効性ある対策は中々見つからないが、若者の興味を惹起させる手段としてネット(ケータイがより効果的だが)の利用も考えられるのではないか。

稽古事全般にいえる事だが、習い始めは指導者につくのが望ましい。効率的で、しかも自己流の悪いクセがつくのも防止できる。

しかし漢詩ではこの指導者との邂逅が極めて難しいのが現状であろう。特に若年層では機会がほとんど無い、と言っても過言ではない。そこでこのつなぎをネットで代行できないかと想像してみる。いい意味での出会い系サイトのようなイメージである。

短歌ではネットにより愛好者が増加したとも聞く。漢詩界の俵万智を期待しないまでも、ケータイを片時なりと離さない若者たちに向い、何らかの情報発信は試みるべきである。ヒト・コトの最新情報の伝達はネットの助け無しでは考えられない。

今回の調査のために一瞥しただけだが、漢詩サイトの多様性には圧倒される。平仄チェックは言うに及ばず、疊字・疊韻・双声の一覧表ツールまで揃っている。更には詩の添削自動ソフト、全唐詩の閲覧などもある。

絶滅危惧回避の一助としてネットの活用を訴える次第である。

友の漢詩に惹かれて

森本　隆泰

もともと私は漢詩のことはよく知らなかった。唯漢詩とはやたらと漢字ばかりの詩と思っていた。それが三十数年前から続いている、故郷九州若松の中学時代からの友の手紙には、決まって末尾に漢詩、といっても漢詩はなく、その読み下し文だけが書かれていた。それでも完全な解釈は出来なかったが、おおよその意味を感じるだけであった。その中で胸を打つ詩があった。

隆大人の母の重患を嘆く

子は故山を捨てて東京にあり
慈母は十年門に倚りて望む
老病孤舟なく死に濵す
口を開けば微かに龍種郷に帰れと

倚門望＝イモンノボウ(戦国策)
老病孤舟＝老い且つ病んだ身の慰めは唯一艘の小舟である(杜甫)
龍種＝すぐれた子(李商隠)

私はこの友人の詩に感動すると共に、親不孝極まりない己を離見反省させられた。

この頃、運命のいたずらか、会社の役職に忙殺の毎日であった。その年母が死去した。私は友の影響で次第に漢詩に惹かれていった。八年前七十歳のとき会社は解散した。

その後、アルツハイマーの妻の看病に終始したが、五年前妻は死去した。会社に行くこともなく呆然とした日々が続いた。そんな時、神奈川県漢詩連盟の初心者講座募集を知り、友のことを思い、漢詩のことを知りたいと参加して受講した。そして受講後、三水会に参加した。それから四年ほど経ったが漢詩の作詩についてはいまだに全く稚拙浅薄で恥ずかしい。独りよがりになっている始末である。さてその友は、昭和五十六年に「倣古詩集」を自費出版していて、私にも送ってくれたのだが、当時漢詩を知らない私は本箱の片隅に置いたままにしていた。思い出して読んだところ、手紙の読み下し文の漢詩が記載されているのに驚いた。

嘆隆大人之母重患

子舎故山在東京
慈母累歳倚門望
孤舟老病方濱死
開口微龍種帰郷

やはり漢詩はいいなあと恥ずかしながらそう思う。友の彼は三年前に死去した。彼が亡くなる一ヶ月前、彼の重病にも係わらず彼の家で酒を酌み交わした。飲もうと飲むまいと身体はどうにもならないと彼は感じていたようだ。その時彼は「あんたの俺に対する漢詩を、俺の葬式のとき飾るようにと言ってある」と言われて、えっあんな詩がと思ったが、詩の出来不出来を超えて言ってくれていると思ったら、涙がこみ上げてくるのを盃を傾けながら堪えた。

漢詩は奥が深い。愚鈍な私だがこの道を歩き続けるしかないと思っている。

「濱盟鷄肋」第七集を発刊す

「濱盟鷄肋」とは？　大方の人は何のことかと思われるでしょう。まず紹介しましょう。これは朝日カルチャーセンター・横浜の漢詩講座にて勉強している詩友の同僚三十名弱の方々の発行している詩集の名称です。既に回を重ねること第七集が昨年十二月に三年ぶりに発行されました。

講座では窪寺貫道先生の時に厳しい指導により毎月二回勉強会を開催しています。神奈川県漢詩連盟はこの講座の初期のころ故中山清氏のお声掛りで発足したと聞いております。神漢連との接点はここにあり、一文をこの広報に載せて頂いた理由でもあります。詩集名の「濱盟鷄肋」の命名も同氏の発案であり、長く継承しています。「濱盟」は横浜に集う仲間達のことであり、「鷄肋」は新漢語林より引用すると「にわとりのあばら骨。食べるほどの肉はないが、捨てるには惜しいことから、転じて、価値は少ないが、捨てがたいもののたとえ」となっております。

さて、第七集の発行の裏話をしましょう。詩集には二六名の会員の詩二五二首が掲載されております。これらの白文と書き下し文のパソコン入力は会員二人で行いました。問題は白文の漢字は旧漢字を原則とするという一文です。そこで可能な限り旧漢字を用いることとして、パソコンに表示できない旧漢字は出版社の力量にまかせることにしました。従って白文には常用漢字と旧漢字が所々混在しています。旧漢字の字体には常用漢字の字体と僅かに異なっているものが多く見受けられます。因みにいくつか記してみますので漢和辞典で確かめてみてください。(漢、花、寒、冬、雪、涙、曙、渚、晩、碑など)旧漢字以外に本字、異体字、俗字などがあり、旧漢字と思っていたら俗字だったというものもあり(例えば垂)漢字の奥深さを知った次第です。

書き下し文について、当講座では特に指導(批正)を受けているわけではありませんが作者の書き下し文に窪寺先生が一句毎に懇切丁寧な加筆と修正を行って下さいました。読み方を僅かに変えることで詩の趣が更に良くなった詩も多く見られ、白文のみならず訓読にも詩情が増し「なるほど」と痛感するばかりでした。

(川上記)

シリーズ　漢詩の話

漢詩と私

理事　古田　光子

私が作詩に出会ったのは平成六年のことです。母が年を取り一人にしておくのが難しくなったので、仕事をやめることにしました。しかしそのあと何をやるか、迷っていた時、湯島聖堂の斯文会講座の中に、石川忠久先生の「漢詩作法入門」(現在の講座名は「漢詩作法」)を見つけたのです。それまで漢詩は読むものであり、作るなどとは思いもしなかったのですが、とにかく受講することにしました。その年初めて開かれた講座で、石川先生から語法・漢詩の規則など初歩的なことを実に分かり易く、丁寧に教えていただきました。おかげで作詩の世界に近づくことができ、苦しくてやめようかと思ったこともありますが、何とか続けてこられました。

振り返ってみますと、この「漢詩作法入門」に続いて、NHKの「漢詩を作る」、そして斯文会の「聖社詩会」に入れていただき、よい添削を受け、先輩たちの詩を見ることができたのは幸せであったと、つくづく感じております。作詩を志す方には是非、詩会にお入りになることをお勧めします。

詩を作る練習には“題詠”が大切だと言われます。ある題を与えられて作るわけですが、詩会では実にさまざまな内容の詩が出され、このような見方もあったのかと、非常に勉強になります。始めのうちは、自分が経験したことの無い題には悩みましたが、次第に自由に情景を設定するのが面白くなり、作詩は“風雅の遊び”といわれるのも納得できるようになりました。まずは色々な題で練習をしてみることが大切だと痛感しています。

詩会にはさまざまな分野で活躍なさった方がおられます。そのような方からお話を伺うのも大きな喜びです。又皆さんの熱心なこと、特に神漢連の方々は勉強家で、お教えいただくことが多く、ありがたく思っています。

入居しております老人ホームで、「漢詩を楽しむ会」というのを担当しています。昨年は「長恨歌」、今年は「漢詩に見る悲劇の女性たち」として、虞美人や王昭君をとりあげましたが、長いので心配していた「焦仲卿の妻」が平均年齢八十歳位の参加者(ほとんどが女性)に特に喜ばれ、来年も引き続きやることになりました。それで又女性の詩を捜していましたところ、次の詩に出会いました。

夏夜示外　夏夜外(夫)に示す　清　席佩蘭

夜深衣薄露華凝　夜深くして衣薄く　露華凝る
屢欲催眠恐未膺　屢しば眠りを催さんと欲するも
恐らくは未だ膺えざらん
恰有天風解人意　恰も天風の人意を解する有り
窓前吹滅讀書燈　窓前吹き滅(け)す読書の灯

夜が更けても読書に夢中になっている夫の身体を案じる気持ちが、巧みに詠まれているすばらしい作だと思いました。

孤独の詩人は必要ない

副会長　田原　健一

お願いがあるのだけど。周りに漢詩作りを教えてあげて欲しいんだ。

「冗談じゃない、そんな才能も素養も無い」と仰る。そうかな？6～7年も漢詩をやって蘊蓄が無い筈はない。解しがたい。「下手だから」？それはお互い様でしょ。いやいや、漢詩の面白さを周りに拡げたい、そのための話ですよ。「キャリアー・ボランテア」って知っている？　自分が一生懸命やってきたことを、奉仕の精神で周りに教えていくということ。貴方が趣味として嗜んできた漢詩、面白い、仲間にも勧めたい、と思ったら、動くべきでしょう。先生になって教えるんですよ。

「わしゃ、先生と呼ばれるほどの馬鹿でも柄でもないよ」って、それ引っ込み思案の内弁慶、謙虚さはきょうび美徳ではないですよ。

人との繋がりが老後の大切な対策でしょ。自分のことだけ考えて生きるなんて寂しい限り。教えることは楽しいですよ。勇気を持って周りに飛び込んでみてくださいよ。教えることで自分も勉強せざるを得なくなる。尻込みはいけません。孤独の詩人も頂けません。

もっともっと漢詩作りの「コーチャー」が欲しい。教えることで「伝承」と向き合って欲しいと思うこの頃である。

バトル漢詩甲子園
―第二回漢詩サークル交流会開催案内―

昨年十二月に開催した漢詩サークル交流会（神漢連の初心者講座を受講した年度別の学習会相互の交流会）を今年度も三月十五日に開催します。（16頁スケジュール欄参照）

初心者講座も今年度で六回になり、サークル会員も六期生までで合計八一名になります。今回はこれに岳精流日本吟院・岳精会漢詩研究会（同院の神漢連入会者のサークル・一八名）も加えて合計九十九名が参加いたします。（左下欄参照）

今回は、前回のアンケート結果を踏まえ、各サークルの自作の詩を対象にして、各サークルの代表間でバトル（討議）を行い、それを窪寺先生に審査・講評していただくと云う会員参加型の方法を採用いたします。

即ち、各サークルで二首ずつ選出してもらった詩（前記七サークルで合計一四首）を事前に先生に審査して頂いておきます。（最優秀作一首・秀作二首・佳作三首を選考して頂く）

そして当日は、各サークルから一人「論者」を立てて、エントリー一四首について、自薦・他薦を交えて論評・論戦（バトル）を展開してもらいます。

その後、先生の審査結果を発表し、バトルを通じての「論者」の意見との類似点・相違点を明らかにしたうえで、各詩について、ここが良い、こうすればもっと良くなる、という点を中心にして漢詩作法について講演をして頂きます。ここでは自ずと論者（サークル会員）の「漢詩作法の力・鑑賞眼」が評価される形になります。

漢詩入賞者は表彰し、賞品を授与します。

次いで各サークルの詩を「自作自吟」してもらいます。（詩の作者が詩吟が出来ない場合は自サークルから吟者を立てて可）

漢詩と詩吟は同根の親戚関係にありますが、漢詩は出来るが詩吟は出来ない、逆に詩吟はやるが漢詩はよくわからない、という人が、どちらの世界にもまだ結構居ます。今回の自作自吟の趣旨は、漢詩の理解を通してより味わいのある詩吟を目指す、また吟じることによって漢詩をより深く味わう、というところにあります。こちらも、神漢連会員でかつ詩吟界の重鎮である横山先生、三上先生、岡田先生のお三方に講評をお願いします。但し採点・順位付けはせず、「詩の情（こころ）をどれだけ理解し、表現したか」という点を評価してもらいます。

サークル会員以外の方は詩のエントリーは出来ませんが、「観戦・応援」で参加出来ますので奮ってご参加下さい。

参加申込方法は16頁「スケジュール欄」参照。また会場は左図の通りです。（実行委員会）

菜香新館

鉄道　■ JR根岸線　「石川町駅」北口下車 徒歩10分
　　■ みなとみらい線　「元町・中華街駅」1、2番出口下車 徒歩 3分
　　■ 横浜市営地下鉄　「関内駅」1番出口下車 徒歩12分
バス　■ 横浜市営バス　「中華街入口」下車（東門より）

漢詩サークル名称・会員数・学習日

一期生	金星会	一〇名	偶数月第二火曜日
二期生	三水会	一四名	奇数月第三水曜日
三期生	好文会	一一名	偶数月第三木曜日
四期生	詩游会	一五名	偶数月第二木曜日
五期生	五友会	一一名	偶数月第一木曜日
六期生	以文会	一八名	奇数月第三木曜日
岳精会漢詩研究会		一八名	偶数月第三水曜日

二十五年前半のスケジュールをカレンダーに記入しましょう

●漢詩サークル交流会（内容詳細は15頁記事参照）

日　時　三月十五日(金)　午後二時～六時半(予定)
場　所　横浜中華街上海路　菜香新館　(中区山下町一九二　電〇四五―六六四―三一五五)
参加申込　本会報に同封した神漢連口座専用振込用紙で振込
参加費　交流会・懇親会五千円／交流会のみ二千円
締切　二月二八日(木)(振込入金を確認して参加受付とします)

●二十五年度総会・懇親会

日　時　五月二十二日(水)　午後一時～四時(総会・講演会)～六時半(懇親会)
場　所　神奈川近代文学館　大ホール(総会・講演会)～ポートヒルホテル(懇親会)
・講演　石川忠久先生　演題「漱石における漢字文化の受容」
出席・参加申込　後日送付の総会開催案内に同封の神漢連口座専用振込用紙で振込
締切　五月十三日(月)(振込入金を確認して参加受付とします)

●二十五年度初心者講座（友人・知人にお勧め下さい）

期間・期日　四月十一日(木)、四月二十五日(木)、五月九日(木)、五月二十三日(木)、六月十三日(木)、六月二十七日(木)、の六回　(各午後一時～四時半頃)
場　所　神奈川近代文学館
受講申込　神漢連事務局宛　横浜市栄区笠間五―三―二―一〇三
電話・FAX　〇四五―八九五―二六六二　桜庭宛
またはホームページ http://www.shinkanren.sakura..ne.jp へ アクセス

●春の研修会

期日・時間　六月四日(火)・十二日(水)・十八日(火)のいずれか希望日・午後一時～五時
場　所　神奈川近代文学館
参加申込　総会開催案内に同封するはがきで申込(詳細ははがき書面で案内)

☆吟行会

秋に開催予定。詳細は次号に掲載。

編集後記

◇　神漢連の会報も13号になった。今回は、総会も講演会もなく、吟行会が中止になるなどで、掲載記事が少ないことを心配したが、幸い会員の投稿が多く、幾つかは次回送りにするほどであった。

皆さんの文筆意欲が旺盛なことは頼もしいかぎりである。

◇　今年度は六期生20名、岳精会18名が新らたにサークル会員になり、漢詩を始めようという人が増えて連盟の勢いが出てきた。活動も岡崎会長のもとで、新しい企画が実行されて、現代的な変化を遂げつつある感がある。

◇　白居易は有名な「元九に与える書」の中で、自己の詩論を「文章はまさに時のために著すべし、歌詩はまさに事のために作るべし」と提起している。つまり詩歌は現実を反映し、現実を改造するものでなければならないという意味である。白詩のもう一つの特長は、語彙が通俗的で判り易く、明快にすらすらと読めることである。(以上は現代中国の詩人秦泥氏の言葉)

千二百年前に提起されていることは、現代においても漢詩を広めてゆくには最も重要なことである。

まもなく第七期生の募集が始まる。漢詩愛好者を魅きつけるためにも、ホームページとともに会報も大切なPR手段である。会報も白居易の言葉をかみしめて努力してゆきたいと思っている。

(三村・吉岡・中島)